

Tokai Fubokon Letter

特集 第1回文化講座

映画を読む 感想から批評へ

折井 貴大 先生 (高校英語科)

6月26日(日)に父母懇主催の今年度第1回文化講座を、昨年大ヒットした映画『花束みたいな恋をした』を題材に行きます。講師は、現在高1の担任と中1の授業を受け持つ折井貴大先生。今回の特集の前半は経歴やご趣味、生徒に伝えたいこと、そして後半に講座のPRポイントも伺ってきました。

一ご出身は?

福井県出身。京都大学文学部。専門はアメリカ文学。新卒で東海高校に就職し、11年目。就職のきっかけは、元東海教員で京大の大先輩でもある西村先生と寺田先生。西村先生は僕の大学の教授と同期で、「京大英文科から東海高校にぜひ英語の先生を」と希望し、案内を出されていた。名門の中高一貫校と聞き、これは良い機会だなあと。



一ご趣味は?

読書、ドライブ、映画鑑賞、料理。読書は、小説や最近哲学の入門書など。小説の分野は、一番はアメリカ小説。家には本が200冊以上あるが、半分ぐらい



折井先生 手作りの
ジャーマンポテト

は積ん読状態。料理はコロナの緊急事態宣言の時に始めた。ほとんど毎日夕食にお酒を飲む人間なので…ガッツリいけて、お酒のつまみにもなりそうなもの。

一部活は?

卓球部顧問を就職以来務めている。今年から籠谷先生と映画研究部も。もともと顧問をしていた南部先生と僕は映画の話でいろいろ話すことがあったので、そんなつながりもありましてという経緯。

一担当学年は?

担任は高1。中1の1クラスも授業を担当(またぎという)。今まで人事交流はあったが、高校所属の教員が中1の授業をするのは歴史上初めて。授業の担当は、高校英語科主任なので高校は自分が決めている。

一どんなお子さんでしたか?

真面目な子だった。両親からは手間がかからないと言われ、先生の言うこともきくし、勉強も真面目にした。運動は苦手な方だが、中学は卓球部。高校は化学部。理由は化学の先生が、「部員がいなくて潰れそうだから、何もなくていいから誰か入ってくれ」と言うので、「じゃあ何もなくていいなら入りますよ」と。でもその時に化学部に入った5人(共学校だが全員男子)とは今でもずっと付き合いがある。週に1回、化学実験室で喋るだけ。けれどもそれが今でも続いている(年1、2回)ので、何かつながりってすごいな、と思う。コロナ以来会えていないのが残念だが。

一大学のサークルとかアルバイトとか?

卓球同好会。卓球は集まる口実みたいなもので、実質レジャーサークルだった(笑)。アルバイトは2つやったことがあり、1つ目は無印良品の品出しバイト。そこで覚えた知識は、「服屋で良く見えた服が、家で着るとなぜイマイチなのか」ということ。実は服屋さんの鏡は足が長くてスレンダーに見える仕掛けがしてあるので、自分の体型が実際よりも良く見える。家の鏡は当然本当の姿が映るから、「服屋で見たのと違う」と思うわけ。アルバイトすると学校ではわからないことを知ることがあると思った。もう一つは個別指導塾の講師。中学受験の算数を教えた時、自分には連立方程式を使わないと解き方がわからない問題があって、問題集を見ると面積算という計算方法を使うらしい。中学受験以外に何の役に立つのだろうかと思ったが、東海中学に入ってくる子たちは同じ思いをしているので、彼らの算数の勉強に対して頭が下がる。

—数学はお好きですか？

そんなに得意じゃない。理系っぽいって言われるが、理屈っぽいのと理系っぽいのは違う。

—昔から僕は文系だ、と感じていましたか？

それも違う。高校時代は理系クラス。理由は機械とかロボットとか生き物とかが好きだったから。でも数学・物理が高校の時はあまり好きではなかった。やってもできるようにならないし、面白くなかった。「大学では自分の得意なことをやった方が良さだろう」と思ったのが高3。理系クラスから文転して文学部に行った。だから世界史はほとんど独学で。僕は言語で物事を捉えるのが面白いと思う。大学で学んだドイツ語も会話はできないけど、少し読む位なら。

—お休みの日は？ 車好きとも聞いています。

一番多いのはやっぱり映画。それから最近は料理も。車も好きで、今はイタリアのアバルト595、マニュアルトランスミッション。車はマニュアル派。色の濃いグレーはすごくシックな感じで気に入っている。休みにはドライブへ出かけることも。イタリア車を買ったのは初めてだが、アルファロメオとかやっぱりイタリアのデザインは日本よりも明らかに洗練されている。内装もおしゃれ。日本車は、技術力は高いけれど、デザインに関しては完全にヨーロッパ車の後追い。



愛車でドライブへ

—教師になった理由は？

僕はなりたい職業がずっと見つからなかった。勉強は好きで、できるといえばできるけど、職業にどうつながるかのイメージは、結局高3で受験をする時までずっとなかった。逆転の発想で、「勉強が好きなんだから勉強を教える仕事に就けばいいんじゃないか」と思ったのがきっかけ。だから教える、という感じが一番する高校の教員になりたかった。

—東大か京大か？

京大を選んだ理由は、これを言うと身もふたもないが、現役で東大に受かりそうになかったから。世間では東大と京大と横並びだと思ふ傾向があるかもしれないが、全く難易度が違う。京大は東大に比べたら相対的に簡単。一番違うのは二次試験の科目数。東大

は二次試験で社会2科目(自分の場合世界史と日本史)を使わないと受験ができない。両校、二次で数学があるが、京大、特に文学部は数学がそんなに得意じゃなくても英語ができれば入りやすい。それに京都は僕の地元の福井からすごく近くて、頻繁に帰省できた。ゴミが溜まってきたりとか、何か面倒くさくなったりした時に(笑)

—教職への興味

高校から。良い英語の先生に出会ったのもあるけれど、教師がいいなと思った理由は高校で担任だった数学の先生の影響。英語を選んだ理由は英語が好きだったから。父親も教員なので、その影響もあると思う。中学校の時は反抗期で、父親と同じ職業にはつきたくないと思っていたが、高校になると変わった。

—実際に教員になって

東海は多くの点で、良い意味で特殊な環境だと思う。いところが公立中学で教員をやっている、本当に大変な仕事。夜9時ぐらいに帰るのが普通だという話で、休みの日も部活がある。世の中の普通の学校の先生は、今では社会問題になるほど大変。東海は夜7時には職員室に人はまばら。労働環境という点では世の中の99%の学校より恵まれていて、教員が自分の勉強時間を確保できる。学校の教員になるような人間は勉強好きだから、時間があたらだんどん勉強して新しい知識を吸収していく。東海は労働環境の良さが先生たちのこだわりの試験問題の作成や、色んな活動、豊かな教育につながっていると思う。

—東海の生徒はどうですか？

10年前初めて教えた時と今とでは、かなり生徒の印象が違う。当時は「優秀な進学校だと思っていたのに、なんでこんなに態度が悪い子ばかりいるんだ」と思った。よく言えば元気いっぱい、悪く言えば野蛮な人たちの集まり。授業なんて成り立つ学校じゃないというのが最初の印象だった。窓から「ウォー」と叫ぶ生徒の姿から、「東海(ひがしうみ)動物園」という人もいる。話してみると一人ひとり賢いのに、集団になった時に「いかに先生を困らせてやるか」みたいな、そういう感じがした。(ちなみに、その代の卒業生で今年、高校英語科に玉井宏志朗先生が入った。彼は僕が最初に教えた高校生。)当時は大学出たての何も

知らない22歳。同僚の先生やお母さんたちに優しく見守られ、言うことを全く聞かない生徒と日々格闘し…というのが1日目。それが今では、教室へ行くと、「教科書を出して、問題を解きましょう」と言ったら解く。「音読しましょう」と言ったら読む。順に当てていって答えさせたら答える。素直で真面目になった。最近でもキヤーキヤー言っているが、先生が生徒を「コラー!」と叱る場面はすごく減ったし、溢れ出るエネルギーみたいなものはあまり感じなくなった。真面目になるのもよし悪しだと思う。今も個性はある。けれども抑えられない位のエネルギーを感じる子は少ない。授業に関しては昔と今ではもう別の学校。

一 東海生に伝えたいこと

いろいろあるが、一番は「良きエリート」になってほしい。今春の文系 A 群の卒業生にも言ったことで、「君たちは間違いなくエリートになる。官僚、政治家、会社の社長、弁護士とかそういう仕事にこれからついていくのだけれど、単に社会的な地位が高いエリートになるだけではダメで、知性や教養、そして自分より弱い立場の人を思いやる想像力が必要だし、綺麗事を綺麗事だと言って切り捨てるんじゃないで、他人をいたわって、正義とか平和とか平等とか、そういうことがちゃんと堂々と言えるようなエリートにならなきゃダメだよ」と。それが一番伝えたいこと。お金を稼いだり、出世したりということが一番にはして欲しくないと思う。

一 二番目に伝えたいこと

自分の好きなものを大事にしてほしい。生徒には「勉強とスマホゲーム以外のことを必ず何か1つやりなさい」と言っている。本でも映画でも、スポーツでも、サタプロでも文化祭でも、自主的な活動でもいいし、友達と過ごす時間でもいい。誰かと一緒にやることでも、あるいは自分一人の世界でもいい。とにかくみんなと同じことだけをやるんじゃないで、自分なりのこだわりを持って高校生活を送って欲しい。映画研究会をやり始めた理由はそれ。学年400人の中の5~10人ぐらい、「ここには自分の好きなものがある」と思ってくれば嬉しいし、そういう集まりがたくさんあると良い学校になると思う。サタプロ・文化祭はすごく規模が大きいけど、大きい集まりに馴染まない子は当然いる。だからこういう小さな集まりが色々あって、自分の興

味関心、自分が学びたいこと、やりたいことをやる機会が、なるべくたくさんあった方がいいなと思う。自分の場合は化学部があって本当に良かったと思う。みんなが集まって週1回話す時間がなかったら、勉強とゲームだけして終わっちゃっていたかもしれない。

一 サマーセミナーにも講座を。やっぱり楽しいから?

サマセミにはなるべく講座を出すようにしていて、7年ぐらいやっている。去年はエヴァンゲリオン講座を出したが、そっちに舵を切ったのは初めて。今年もその方向でやるが、やっぱり楽しい。今になって、「大学教員だったらどんな人生だったかな」と思うこともある。東海で働きながら、大学の研究ができれば…と思うほど最近勉強がどんどん面白くなってきた。30歳ぐらいになって、本を読んで勉強したり、人の考えを聞いたり、自分の考えをまとめたりするのは面白いと思いはじめて、自分なりに勉強したり独自研究したりしたことを発表する場が欲しくなった。ということで、「大学の授業を自分が1コマだけやるとしたら何をやるか?」そんなつもりでサマセミに講座を出している。



ここからは文化講座に関連したお話です。

サマセミの様子

一 映画の講座を選んだ理由

理由はすごく単純で、映画が好きだし、自分なりに映画批評の本を読んで勉強というか、批評を楽しんでいるので。本を読んだり、ネット記事などを見たりするといろいろ勉強になるけれど、一人でため込み続けているとだんだん誰かに話したくなってきて、話す場として活用させてもらおうかなあ、と思って。

一 どんな映画をどれくらいの頻度で?

特に偏りはないが、邦画より洋画の方が多い。それからSF映画とか怪獣映画はほとんど欠かさず観に行く。(今日公開のシン・ウルトラマンとか?) 本当は今日観に行きたいのだけれど、予定があって明日か明後日に。シン・ゴジラも大好き。庵野秀明さん(エヴァンゲリオンの生みの親)って怪獣とか特撮大好きな人じゃないですか。だからそういう人の作る映画は必ず観る。話題になっている作品は一通り観るようにし

見て楽しめる映画がいいかなと。もう一つはチラシにも書いたことで、**一見わかりやすく何も深く考えるところはなさそうだけど、よく注意してみると「あれ？」って思って、ちょっと立ち止まって考えて欲しいところがこの映画にはいくつかある。**一定以上の年齢の方だと、「私にも覚えがある、若い頃ってこうだよ」と共感できる方は多いと思う。けれど狙いとしては、「**本当にあの映画の主人公の2人に共感していますか？自分も同じような経験をしたと言えますか？**」というのが、講座の最大のテーマ。

一どんな感じで観てきたらいいですか？

何も考えずに、楽しんでてもらえればいい。謎を解いてやろうなんて考えなくていい。ただ観て、面白かった、うるっときた、切なかったとか、そういう素朴な感想を持って講座に来てもらえればいい。その上で、「この映画をそんな風に見る人がいるとは思わなかった」という感想が出たら狙い通り。

一いつも斜めから映画を観ています？

少なからず考えながら。具体例では、最近『カモンカモン』という今時珍しい白黒映画があって、主演は『ジョーカー』で有名なホアキン・フェニックス。すごくいい映画で、中年男と男の子の心温まるふれあいという、誰でも安心して観られる映画。その中で、主人公が男の子に「女性の体っていうのは女性のものなんだ」と言う。ストーリーに何も関係ない、些細な一場面。でもこれは、今アメリカで人工妊娠中絶を法律で禁止する州がいくつも出てきていて、そのことへの批判。映画の何気ないシーンには、実は政治批判になっ



ていたりする時もある。そういうのを映画監督とかは仕掛けてくる。だからそこに気づくというのは映画の楽しみ方の一つ。

一最近の倍速再生についてどう思われますか？

これは講座の内容に関係があって、『映画を早送りして観る人たち』という本が出ている。実は『花束みたいな恋をした』という映画と、映画を早送りで見るとは、僕が思うに無関係ではない。講座で話すが、簡単に言うと、現代人は忙しすぎる。単に忙しいだけでは

なくて、気持ちの余裕がなくなってきている。自分の感覚からしたら、「早送りして観る位なら映画なんて観なきゃいいのに」と思う。じゃあどうして早送りしてまで見るかという、映画でもドラマでも何でも、情報を常に最新の状態に保つために「処理」しないとイケない感覚がすごくあるから。昔はみんな同じTV番組を見て、次の日学校で昨日のTVの話をしていたから、家のお茶の間でTVをつけていればいいだけだった。それが今はネットの時代になったせいで流行っているものが多すぎて、みんなの話題について、みんなの輪の中に入ろうと思ったら、すごい量の映画とかドラマをこなさなきゃいけない。それが早送り現象につながっている。僕はちょっと気の毒だと思ってしまう。

一生き急ぐ

東海でたまに「生き急ぐ」という言葉を聞く。死に急ぐの逆。比較的若い僕から見ても、本当に今の20代以下の人たちは生き急いでいる感じがする。東海の教員の良いところは、少し違う時間の流れがあって、生き急いでいないところ。生徒たちに伝えたいことの一つにもなるけれど、映画を早送りして観てまで続ける人付き合いにそんなに価値は無いし、情報をつねにアップデートするために映画を早送りして見るような生活は豊かな生活じゃないと思う。けれども世の中がそうなっている中、「あなた1人だけでもそこから外れなさい」と言ってもそうはできないので、難儀な時代に生きてるなあ、と感じる。人生にはぼんやりする時間が大事だ。80年も生きるのに、そんなに毎日毎日、「今日はこれを見て、明日はあれを見て…」と詰め込んで何の得があるのか？ ポーツと1日何もしない日があってもいいと思う。それが豊かさというものでは。

編集後記

堅そうで、クールなイメージの折井先生。よく話を聴いてみると、あれ？イメージと全然違う、と思ってどんな批評が聴けるのかと、講座への期待が大きく膨らみました！お話の中の情報量や熱はすごいのに、なぜかゆったりした時間の流れを感じ、こだわりの趣味で豊かな人生を過ごす、という言葉が自然な、大らかさを内に宿した紳士的で素敵な先生でした。いろんな映画を観たくなりました！